

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第2回)

イギリスの中の日本語

30年前に初めてイギリスへ行ったとき、すぐにやってみようと思っていたことがあった——「フィッシュ・アンド・チップス」を買って食べる。それも、レストランやパブで注文するのではなく、街角の売店で。当時、イギリスも他の国の例にもれず、アメリカのハンバーガーチェーンが街を席卷し始めていたのだが、それでもまだ伝統的なファーストフードとしてのフィッシュ・アンド・チップス店がどこの街にも点在していた。カウンターで注文すると、ギトギトの油がテカテカ光る白身魚のフライと、さらにギトギトの油を感じるフレンチフライ（フライドポテト）の束が新聞紙に包まれて出てくる。それが定番のスタイルだ（ちなみに、新聞の印刷技術も今ほど進んでいなかったもので、インクの黒い色が指先に残る始末だった。）。

さて、そういうチープなイメージにぴったりの店を見つけ、カウンターで注文し、思っていた通りの品を手に入れた。さっそくパクリと食らいつく。「……」思っていたほどおいしくない（それもある意味イギリス的なのだが。）。他に客もいなかったもので、店のお兄さんが話しかけてきた。「どこから来たの?」「日本」「観光?」「うん」こういうときはもっと気の利いた話をしたいと思うのだが、英会話能力に限界があるので、教科書通り

の発言しかできない。「フィッシュ・アンド・チップスって、初めて食べたけど、予想していたよりおいしかったよ」「そうだろう、うちの店は特別だよ」なるほど、この店が特別で他の店はもっとおいしいのか、と心の中でつぶやいたのは内緒である。

と、突然、お兄さんがこう言った。「最近、ロンドン中をジャパニーズ兄さんが動き回ってるね」「は…?」ちょっと考えてから「えっと、僕もその一人だけど。ジャパニーズ兄さん」「は…?」今度はお兄さんが少し考えてからこう言った「いや、ダツンのことだけど…」ん? ダツン? DATSUN… ああ、ダットサン、日産のことか。「最近、ロンドン中を日本の日産の車が走っているね」と言っていたわけだ。いきなり日本語が出てきたので面喰ってしまった。

数年前、やはりロンドンの某レストランで、メニューを見ていた僕が日本人だとわかると店員がいきなり日本語でこう言った。「これ、おいしいですよ、先生」え? どうして教員だって知ってるの? と聞くと、『ドラゴンボール』を観て日本語少し覚えました、先生」と言う。なるほど。またしても面喰ってしまった、ちょっと違う意味で。